

戦後、昭和の時代を創造したリーダーたちのライフストーリー研究

長井 覚子・源 証香・松永 静子*・村上 博文**・汐見 稔幸***

研究実績の概要

はじめに

本研究は平成28年から「園の中心的な担い手の園の組織づくり、人づくり」として保育のリーダー（園長・理事長ら）たちの保育の質の模索、実際の努力とそれによる園づくりからリーダーらの役割と資質について明らかにすることを目的とした研究をもとにして調査を行ったものである。これまでの調査で戦後のリーダーらは社会的問題意識が高く、公的な支援や資金が得られない状況でも自主的かつ能動的な役割意識を持って園運営に尽力していることが明らかとなった。今年度は社会性・固有性の資質と役割に特に着目し、戦後の保育の黎明期を創造したリーダーらのインタビュー調査の結果として報告する。

研究方法

・インタビュー対象者の選定条件

- ①昭和20年前後に園長職または副園長職となる
- ②園の保育に関する文献が存在する
- ③地域に定着し現在までの経過が公開されている
- ④担い手自身の保育への思いや方針が保育に反映されていると考えられる

・半構造化面接（約2時間）により、逐語録をデータ化した。

結果：逐語録データより抜粋

「職についたきっかけ」

A：23年に児童福祉法ができたときは、まだみんな立ち上る気力もまだこれからという時に多分子どもたちの笑顔に励まされて、この子たちのために復興しなくちゃいけないと。

B：色々子どもの状況だとか、自分の思いを一生懸命に伝えて…用務員でもいいし、とにかくそこで働かせてほしいっていうことで、しばらく黙って聞いていたK先生（故人）が、一言だけ「大変ですよ。それでもやりますか？」って言われたのが、この仕事のきっかけ、始めです。

「当時の運営状況と課題」

A：まず0歳児6対1を3対1に市長に掛け合って変えたんですね。その場合保育料が倍になるわけです。私が自分の園っていうこと考えずに、K市の子どもは公立も私立もないじゃないの、じゃあ民間の卒園児は税金半分にしてくれるんですね、と。だからKの市子どもは将来のK市を担う子、この根っここのころを大事にしないでどうするのっていうことで、運営費の面は大体ととのえてきたんですね。

*客員研究員 秋草学園短期大学

**客員研究員 常葉大学

***白梅学園大学名誉学長 白梅学園大学大学院
客員教授

B：私はね、ずいぶん都庁に行って認可申請したりとか、もう全然相手にされなかったですね。建物が狭い。庭が狭い。人がいないということのようなことで追い返された、僕はもう当時疲れ果てて、役所から帰るとぐったりしてたんだけど、あのとき保育者に言われたひとつがとっても契機でしたね。「園長ね、そんなにね、負け犬のようにがっかりしないで、園長ひとりで考えてひとりでやろうとしてるからいけないんだよ。もっと保護者に訴えて頑張ってもらったら?」「地域の人に頑張ってもらったら?」って言われて、それから地域の人や保護者の人に話をしていたのね。

「これまでの園運営における重点的な取り組み」

A：そこに困った人がいるから、延長保育も全部先んじてやってきたんですけど、条件を整えましょうって、だから延長保育5年の歩みを出した時はみんなが抵抗している時でしたけど。

B：こちらからなんかしてあげるってことじゃなくて、子どもが育つのをみんなで喜び合える、そういう場所にしましょうよ、ということで作り出していったのが、水辺の学校。

まとめ

本調査におけるインタビュー対象者らはいずれも社会的な高い役割意識を持ち終戦直後の混乱と子どもを取り巻く劣悪な環境に心を動かされ、リーダーとなった。強い使命感と信念を持ち保育制度も整わず運営経費も覚束ない状況であっても社会的役割意識は揺るぎないものであった。固有の信念と周囲の信望に支えられ保育所保育や私立

幼稚園を独自の方法で新たな取り組みとしてこの時期に展開したことが明らかとなった。終戦後の民主的な教育運動や保育運動もその背景にあり、模索しながら自由に保育を創造しようとする機運が聞き取りの内容から伺えた。その後の高度経済成長期のリーダーらの自由な保育の創造にどのような変化があったか、さらに検討を続け、リーダーらの資質との関連にも着目し研究をすすめたい。